

二〇〇七年一月

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(三)

奈良文化財研究所

觀世音經十卷記也

1

觀世音經十卷記也

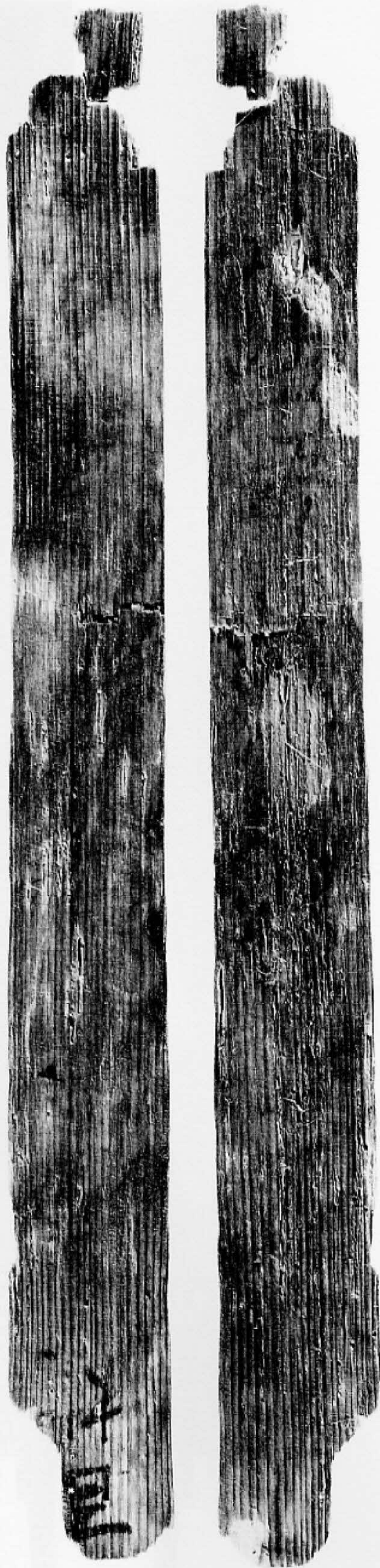
觀世音經十卷記也

8

觀世音經十卷記也

觀世音經十卷記也

2



28



5

(4 : 5)



6



7



26



29



30





36



13



14



18



31



17



32





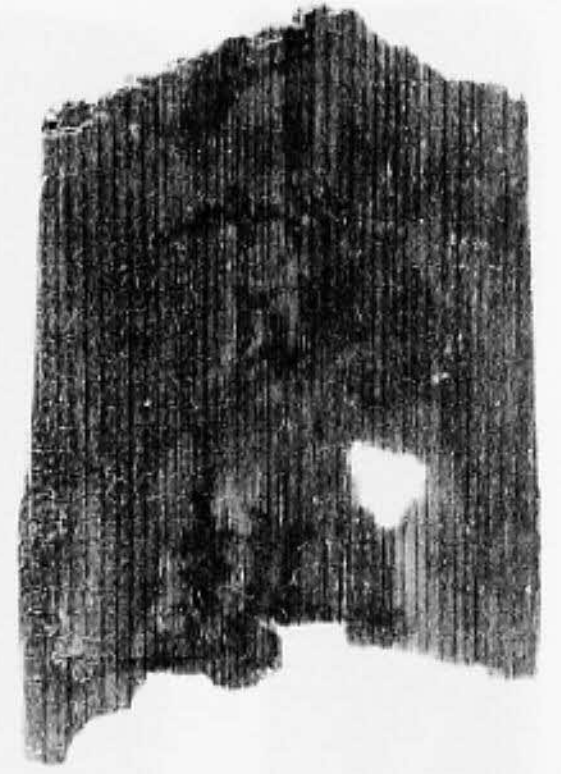
44



25



16



20



3

(4 : 5)



39

33



152



244



282



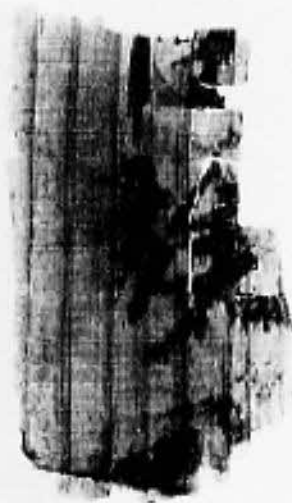
156



150



121



193



162



111



60



72



190



160



200

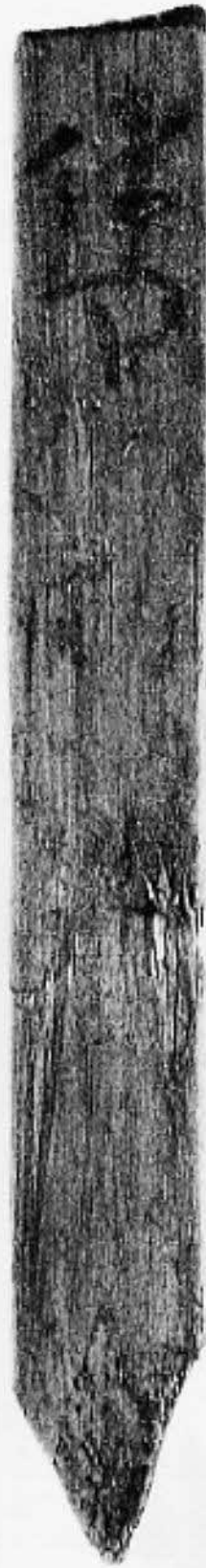


191

(1:1)



340



392



403



402



329



404



399



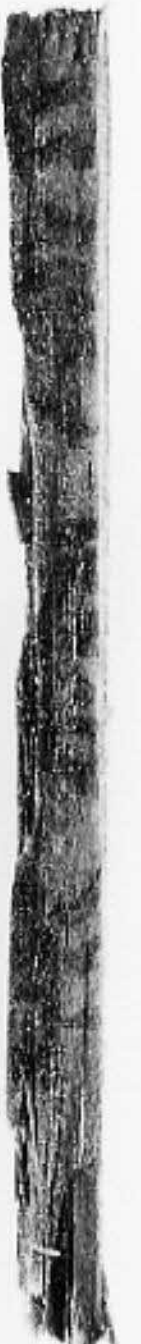
356



337



405



330



参考



443



444



442

この概報には、さきに刊行した『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(二十)』(二〇〇六年一月)。以下『木簡概報二十』と略す)以後、二〇〇五・二〇〇六年度に飛鳥藤原宮跡発掘調査部(二〇〇六年度からは都城発掘調査部〔飛鳥・藤原地区〕)の行なった発掘調査で出土した木簡のうち、主要なものを収録する。木簡が出土したのは、①飛鳥藤原第一四〇次調査(石神遺跡第一八次調査)、②同一四二・一四四次調査(藤原宮朝堂院地区)である。このうち①は『奈良文化財研究所紀要二〇〇七』(二〇〇七年。以下『紀要二〇〇七』と略す)で出土木簡の一部を報告している。

また、二〇〇五年度以前に実施した調査のうち、③飛鳥藤原第一二八次調査(藤原宮朝堂院地区、二〇〇三年度)、④同第六三一二次調査(藤原京右京七条一坊西北坪、一九九〇年度)、⑤本薬師寺西南隅の調査(一九七五年度)の各調査で出土した木簡も収録する。③は『木簡概報十八〜二十』で報告したが、本号をもって完結となる。④⑤はこれまでの『木簡概報』では未報告のものである。なお④は『飛鳥・藤原宮発掘調査概報二十二』(一九九二年)で、⑤は『同六』(一九七六年)で出土木簡の一部を報告してある。

この他、⑥飛鳥藤原第六五次調査(藤原京右京一条一坊西南坪、一九九〇年度)出土の木簡についても、『木簡概報十一』ですでに報告済みであるが、釈文に訂正箇所があるので、出土遺構の概略とあわせて掲げることとする。

一、木簡の出土地点と状況

第一四〇次調査(石神遺跡第一八次調査)

5AMD区 二〇〇五年九月〜二〇〇六年五月

一九八一年度より実施している石神遺跡の継続調査の一八回目。調査地は石神遺跡の中心をなす建物群の北外側にあたる。第一五次調査以来、中心建物群北側の土地利用と近隣に想定される阿倍山田道の確認を主眼に調査を進めており、その過程で七世紀後半頃の木簡が多数出土している。今回の調査区は、第一六次調査区のすぐ北側で、発掘面積は六二五㎡(図1)。検出した主な遺構は、杭列、石垣、礫敷、溝、土坑、自然流路などである。以下、既往の調査所見にもとづく時期区分(A〜C期)に従い、遺構の概略を記す。

〔A期以前〕七世紀前半以前

調査区の大部分に沼沢地S X 四〇五〇が広がる時期。この沼沢地は第一五〜一七次調査区でも検出しており、第一七次調査では流水による自然堆積の状況を明瞭に示していることから、旧流路であったとみられる。調査区の西端には粘土と粗粒砂の境界が認められ、岸に相当する可能性が高い。古墳時代の土師器が出土している。

〔A期〕七世紀前半〜中頃

石神遺跡が最も整備される時期で、大きく三期に細分されている。A3期には、長大な建物で囲まれた東西二つの長方形区画の内外に、

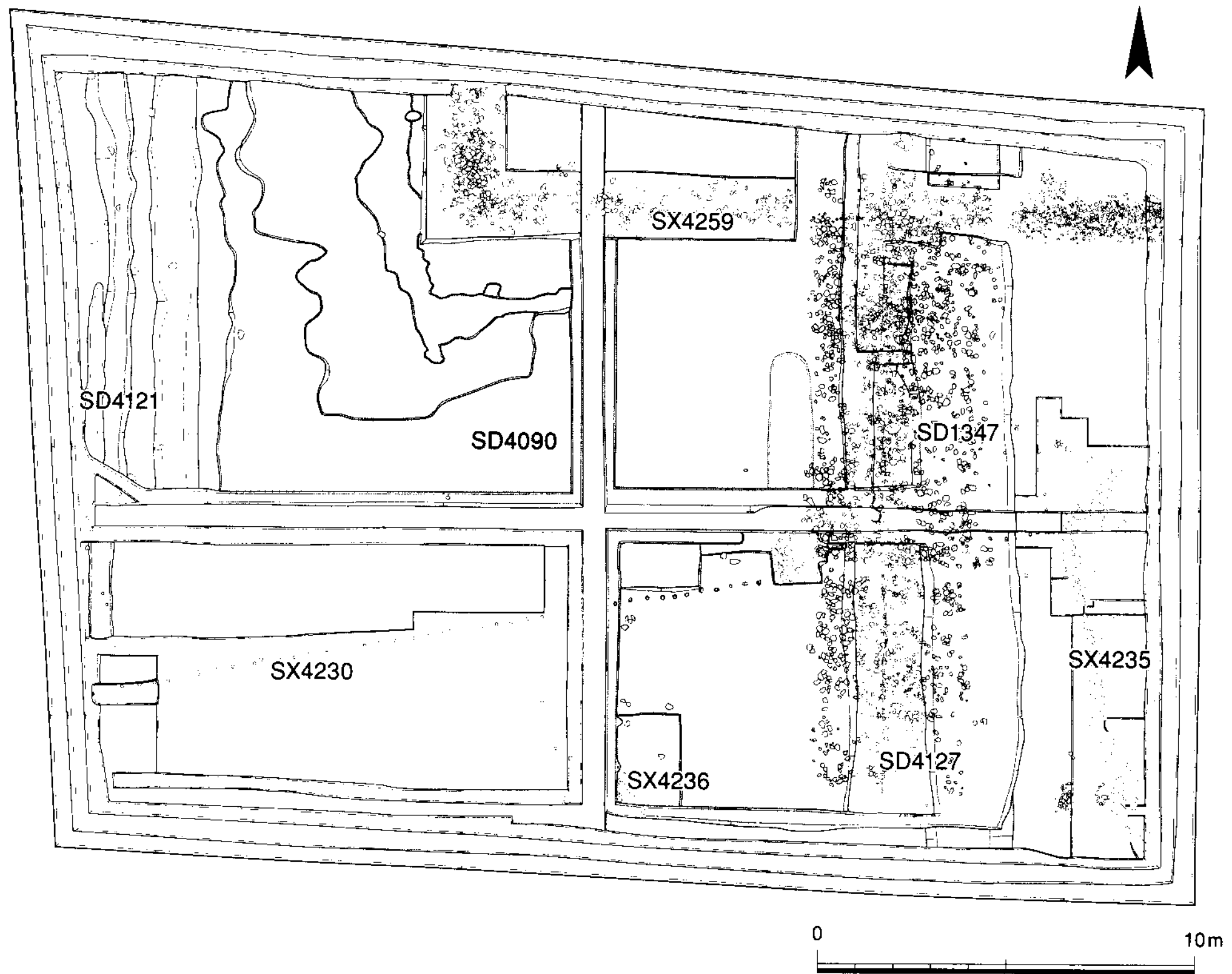


図1 第140次調査遺構図 1:250

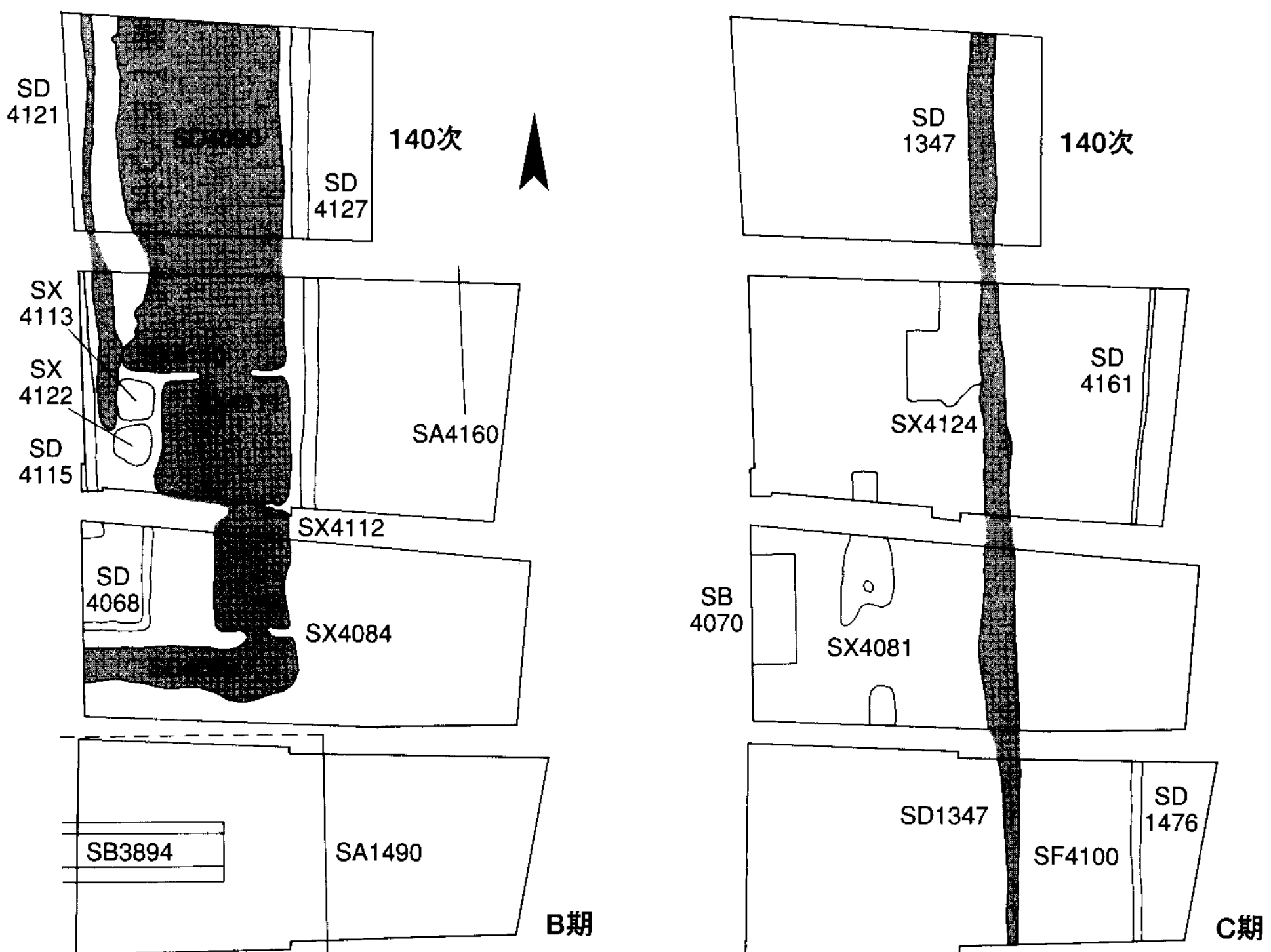


図2 北外周部の遺構変遷図 1:1000

大規模な掘立柱建物や石敷井戸・石組溝・方形池などが整然と配置され、『日本書紀』斉明紀の公的饗宴施設に該当する可能性が高い。だが、これら施設群の北外側にあたる本調査区では、杭列SX四二三〇、石組列SX四二三五・四二三六が存在する程度で、時期の細分化は難しい。SX四二三〇は、東で北に約一〇度振るコの字形を呈する杭列で、直線的に約二五m、四七本が並ぶ。SX四二三五は、北で西に約一〇度振る石組列で、杭列との交差地点より北側には続かない。面は東に向き、現存最高四段の石を積む。SX四二三六は、北で西に約二三度振る石組列で、北に長くは続かない。この他、A期の可能性がある遺構としては、後述のSD一三四七と同じ位置を流れる南北溝SD四一二七がある。幅二・〇m、最大深さ〇・三m。

〔B期〕七世紀後半

石神遺跡の本体では、饗宴施設としての性格を一変させ、塀で画した多数の区画がつけられ、掘立柱建物や倉庫などが建てられる時期である。次のC期の遺構とあわせて、官衙として利用された可能性が考えられている。これらの施設群の北外側にあたる第一五・一六次調査区では、逆L字大溝SD四〇八九・四〇九〇などが形成され、その北隣である本調査区でも、南北溝SD四〇九〇の続きを検出した(図2)。幅一七・六m、最大深さ〇・六m。また調査区の西端で、第一六次調査で検出した南北溝SD四一二二の続きを確認した。幅一・一m、最大深さ〇・二mで、二股に分かれている。

〔C期〕七世紀末

石神遺跡の本体では、掘立柱建物や倉庫・井戸などが点在する一辺約七〇mの方形区画が設けられ、その東側には屈曲する二条の南北溝を伴う道路が形成された時期である。この道路の西側溝である南北溝SD一三四七は、北に向かって溝の規模を大きくし、第一五・一六次調査区を通り、本調査区内へと続く(図2)。幅三・八m、最大深さ〇・五五m。暗灰色粘土・黒灰色粘土の堆積するSD一三四七Aと、灰色粗粒砂の堆積するSD一三四七Bに区分できる。なお、SD一三四七AはB期に遡る可能性もある。

〔C期以降〕

中世以降とみられる礫敷SX四二五九、それより古い礫敷SX四二五五がある。

〔木簡〕木簡は、SD四〇九〇から三八点(うち削屑一点)、SD四一二一から七点、SD一三四七Aから五八点(うち削屑三二点)、SD一三四七Bから四点、遺物包含層から二点、遺構不明一点、計一一〇点(うち削屑三三点)が出土した。SD四〇九〇・四一二一・一三四七は第一五・一六次調査でも検出され(SD四一二二は第一五次調査では未検出)、大量の木簡が出土している。

その他の出土文字資料として、SD一三四七Aから「寺水」「間人内」の墨書土器が出土している。

以上、発掘調査の詳細は『紀要二〇〇七』を参照されたい。

第一四二・一四四次調査（藤原宮朝堂院地区）

5 A J G 区 二〇〇六年四月～十一月

藤原宮朝堂院地区の東第四堂・東面回廊の調査。藤原宮大極殿・朝堂院地区は、すでに戦前に日本古文化研究所によって発掘されていたが、奈良文化財研究所が二〇〇〇年度から再発掘することとなり、その九回目にあたる。調査区は北区（第一四四次調査）と南区（第一四二次調査）の二つに分かれ、発掘総面積は二〇二四㎡である。検出した主な遺構は、藤原宮以前の古墳周濠・落ち込み・溝、藤原宮期の朝堂院東第四堂・東面回廊とその関連遺構、平安時代の土坑である。以下、藤原宮期の遺構に限定して概要を述べる。

東第四堂は桁行十五間（二一〇尺）・梁行四間（三八尺か）の瓦葺き南北棟礎石建物である。しかし、造営当初の梁行は東側にもう一間分のびた五間であり、造営途中に計画変更（切り縮め）されたことが判明した。同様の所見は東第三堂の発掘調査でも得られている。東第四堂の礎石据付掘形は二九基検出し、残存の良好なものは一辺一・五～二m前後の隅丸方形で、深さは約〇・三mある。ただし礎石・根石は残存しておらず、根石を据える以前の拳大の栗石があるにすぎない。また造営時の足場穴九基、解体時の足場穴二四基も確認した。造営時には東第四堂の南北に東西溝SD一〇五〇一・一〇六〇一を掘削し、排水や建物建設のための水準を得る溝としたが、東第二堂や東第六堂のように、四周をめぐるせてはいない。た

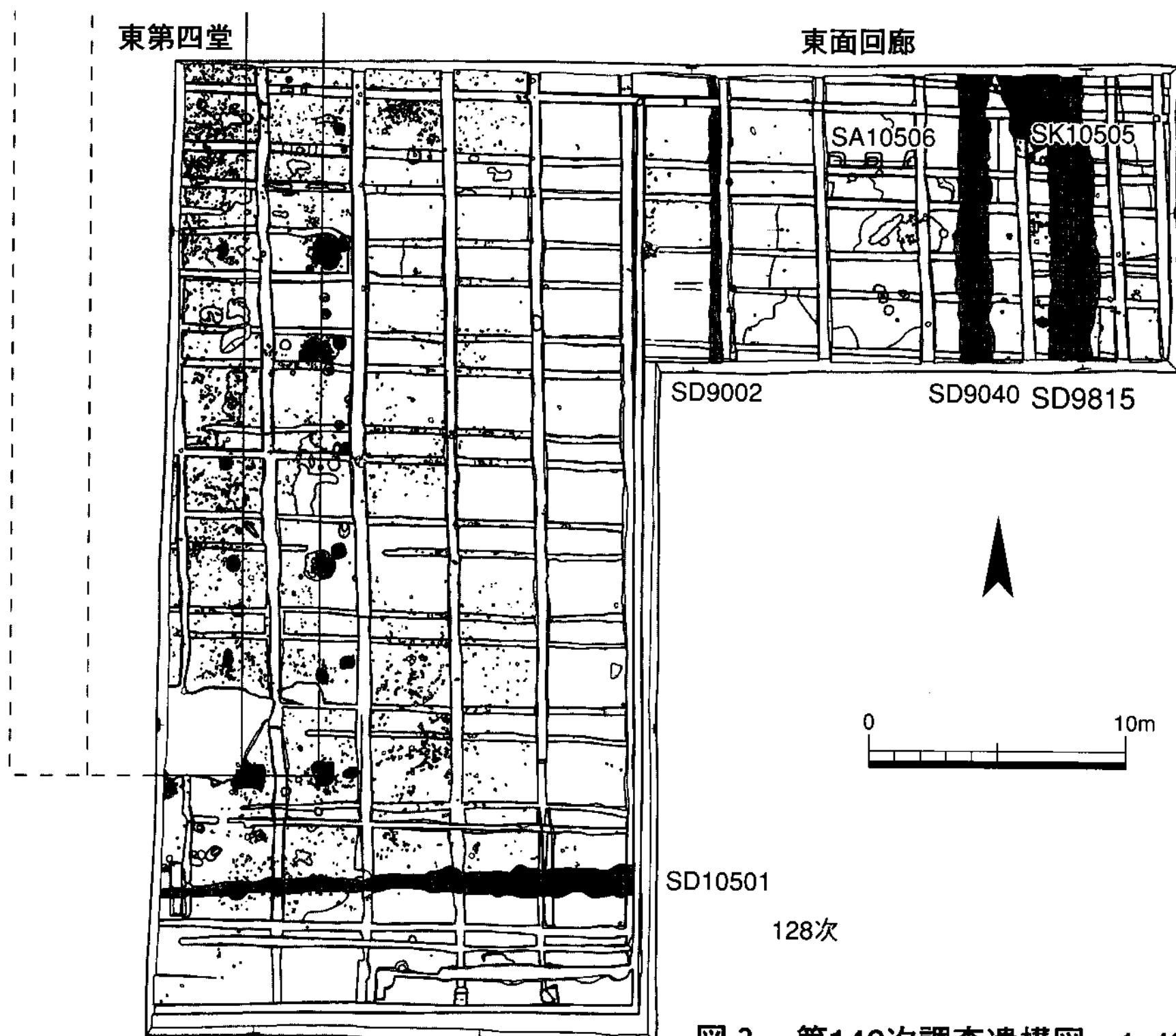


図3 第142次調査遺構図 1:400

だし東第四堂の東側からは窪地SX一〇六〇六が検出されており、この窪地が同様の機能を果たしたと考えられる。これらの溝や窪地は、東第四堂の造営時に生じた廃材である大型の瓦片・木片を廃棄して埋められ、その上で基壇外周部全体が整地され、朝庭部を中心に礫が敷かれている。基壇外装については、地覆材の抜き取りとみられる南北溝を一部検出しているが、凝灰岩片はまったく含まれておらず、玉石・埴・瓦を用いた痕跡もなかった。東第二堂・東第三堂・東第六堂の調査所見もあわせて考えると、地覆材・羽目材・葛材に木材を使った基壇であった可能性はある。

東面回廊は、南地区（第一四二次調査）で南北約一一m分調査したにとどまる（図3）。東面回廊の基壇は完全に削平されており、西雨落溝SD九〇〇二、東雨落溝に先行する下層の造営時の溝SD九〇四〇、足場穴四基を検出するにとどまった。西雨落溝と東下層溝の心々間距離は一〇・二mで、これまでの調査所見と合致するが、柱間寸法などのデータは得られなかった。この他、回廊よりも東方で、南北大溝SD九八一五とその西側に接した土坑SK一〇五〇五を検出した。SD九八一五・SK一〇五〇五は瓦片・木片を含み、造営時の整地土によって完全に覆われている。

木簡は、南地区の東面回廊の東方に位置する南北大溝SD九八一五から、削屑一点が出土した。SD九八一五は幅約二m、深さ〇・四m。この溝はすぐ南の第一二八次調査でも検出しており、戊寅年

（天武七年（六七八））・大宝元年（七〇一）・同二年・同三年の紀年銘木簡や、主に郡里制下の木簡が出土している。SD九八一五と東面回廊造営時の整地土との土層関係からみて、東面回廊の完成は大宝三年以後まで遅れる可能性が極めて高まっている。以上、発掘調査の詳細は『紀要二〇〇七』を参照されたい。

第一二八次調査（藤原宮朝堂院地区）

5AJG区 二〇〇三年四月～七月

前述の南北大溝SD九八一五から木簡が出土した（図4）。遺構の概要は『木簡概報十八』参照のこと。『木簡概報十八』では木簡五〇〇〇点以上と報告したが、第一次整理作業の終了により、七九四〇点（うち削屑七七七五点）であることが明らかとなった（表）。

表 木簡点数表

小地区	木簡	削屑	合計
EA70	1	0	1
EB69	3	12	15
EC69	2	2	4
ED69	1	5	6
ED70	1	5	6
EE70	66	1621	1687
EF70	78	6064	6142
EG69	10	54	64
EG70	3	12	15
総点数	165	7775	7940

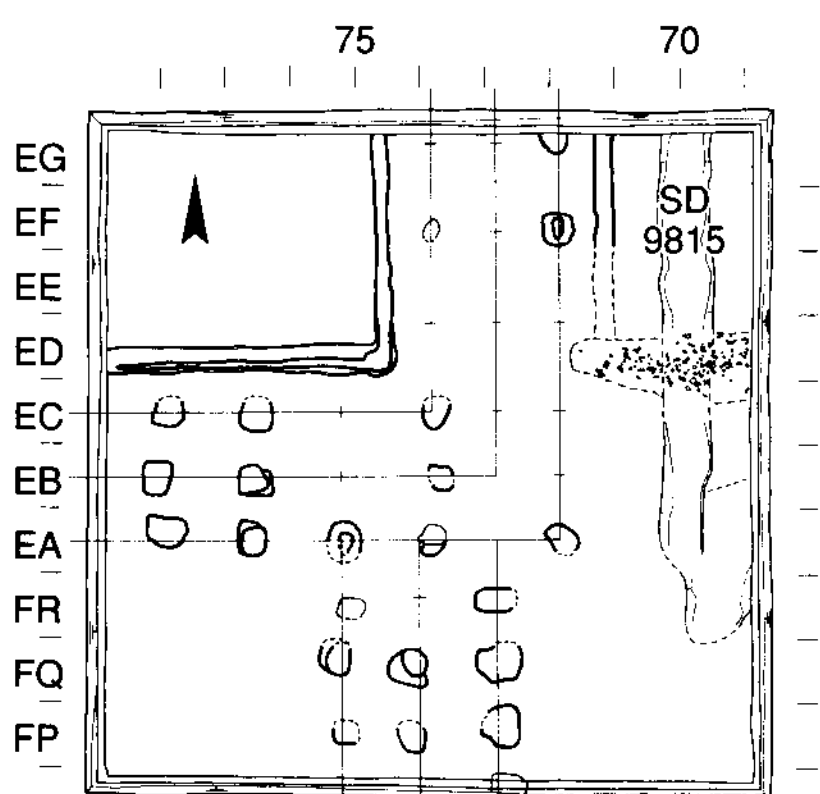


図4 第128次調査 1:700

第六三一―二次調査（右京七条一坊西北坪の調査）

6AJH区 一九九〇年一月―一九九一年二月

橿原市の分譲宅地造成に伴う事前調査。今回の調査地は、藤原京右京七条一坊西北坪の北半部で、二本の南北溝で仕切られた東西三つの空間のほぼ中央区画にあたる（図6）。発掘面積は五八〇㎡。

藤原宮期の整地土の上面において、掘立柱建物三棟、掘立柱塀三条、土坑一一基、素掘り溝三条などを検出した（図5）。

掘立柱建物SB七〇五〇は桁行四間・梁行二間、SB七〇六〇は桁行四間以上・梁行二間、SB七〇七〇は桁行一間以上・梁行二間の南北棟で、柱穴は一辺〇・六―一・二m。SB七〇七〇はSB七〇六〇の南に重複し、それより古い。柱間寸法は、SB七〇五〇・七〇七〇は二・四m等間、SB七〇六〇は二・二m等間である。

東西塀SA七〇五五・南北塀SA七〇六五は、北で西に約四度振れる。柱穴は一辺〇・三mと小型で、柱間寸法は二・四m等間。藤原宮造営以前とみられる。東西塀SA七〇五六はSA七〇五五と同方位であるが、小円形の柱掘形となっているため、藤原宮期以降か。

南北溝SD七〇八〇は幅一・八m、深さ〇・三mで、西接する南北溝SD七〇八一の東肩を壊す。ともに前述の西北坪内を区画する溝である。南北溝SD七〇七五は幅一・〇m、深さ〇・三m。

土坑の大半は建物周辺に集中する。このうち木簡の出土したSK

七〇七一・七〇七二・七〇七三は、SB七〇六〇の北妻から北へ一・二mの地点に位置し、東西二・四m等間で並ぶ。埋土は上層と下層に分かれ、上層は木簡を含む木質層を間層として青灰色粘土と砂の互層がレンズ状に堆積する。垂直近くに掘り込まれた下層は、暗灰色粘土と粗砂の互層が水平堆積しており、藤原宮期の土器が少量出土した。深さは〇・六―〇・九m。

木簡は、土坑SK七〇七一から四一四点（うち削屑四〇三点）、土坑SK七〇七二から四〇点（うち削屑三六点）、土坑SK七〇七三から二七二点（うち削屑二六八点）、掘立柱建物SB七〇六〇の東に位置する柱穴もしくは土坑から一点、計七二七点（うち削屑七〇七点）が出土した。また、SK七〇五二の南に位置する小土坑からは「^{「咋カ」}□」の墨書土器（須恵器坏）が出土している。

木簡のなかには右京に関連する用語が書かれたものが複数あり、西北坪の性格を暗示している。また、隣接する第六六一―二次調査区の便所遺構などから木簡四一点、第六二次調査区の井戸から木簡二四点が出土しており、内容上の関連も認められる（『木簡概報十』）。一町規模の宅地利用の状況が判明している西南坪とあわせ、右京七条一坊の性格を具体的に解明していく必要がある。

以上、発掘調査の詳細は『飛鳥・藤原宮発掘調査概報二十二』（一九九二年）を参照されたい。

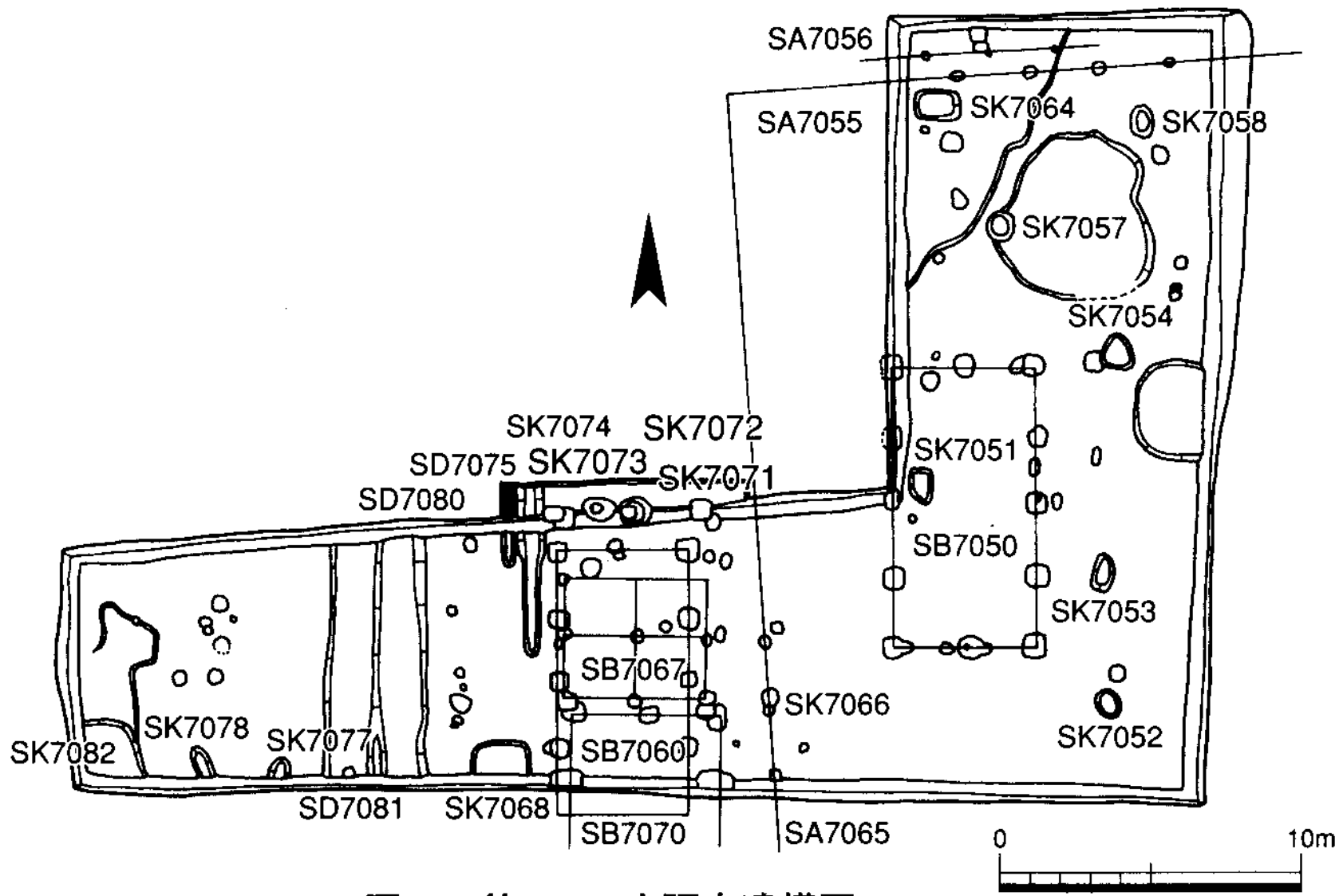


図5 第63-12次調査遺構図 1:400

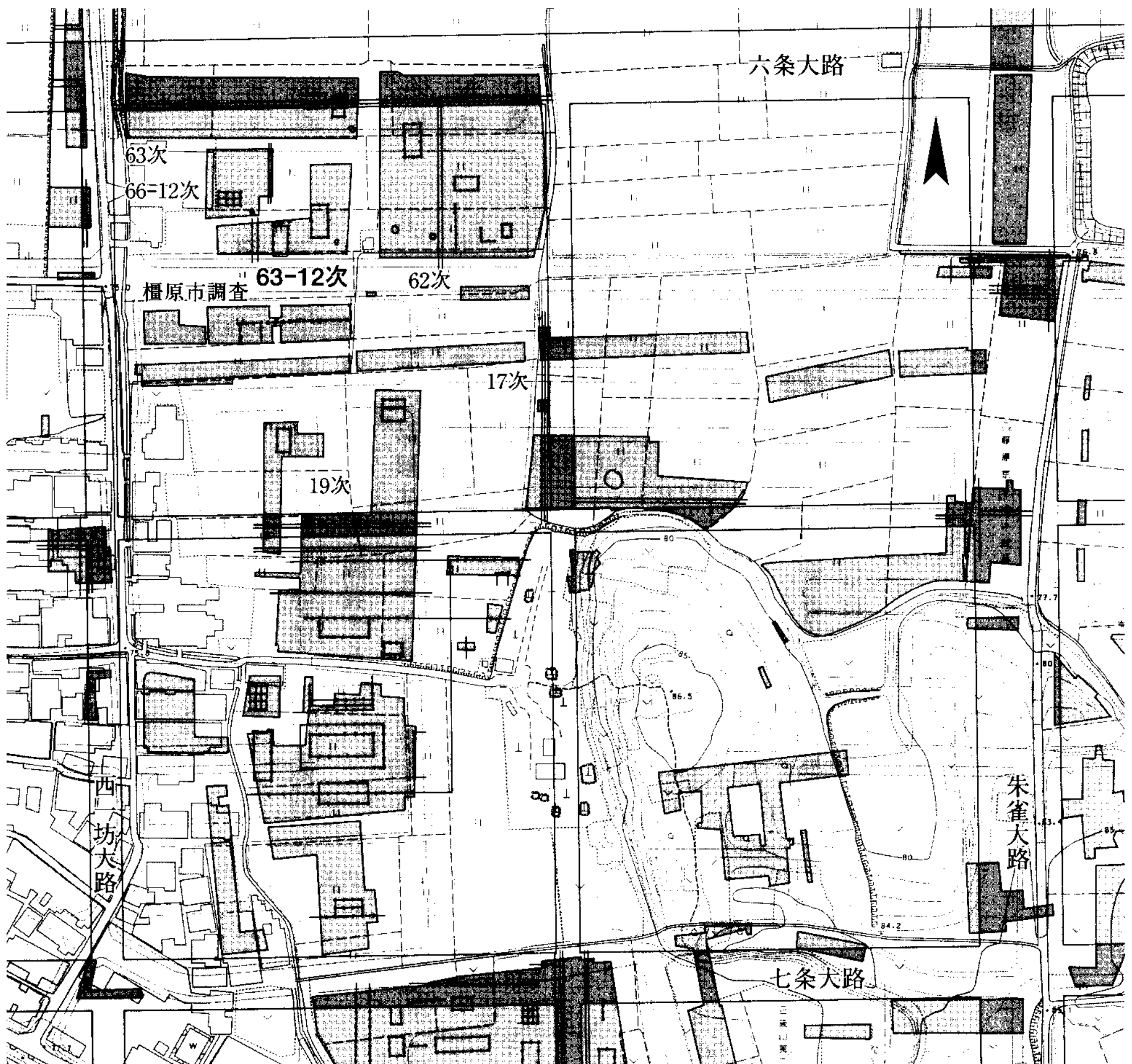


図6 第63-12次調査周辺図 1:2500

本薬師寺西南隅の調査

6 B M Y 区 一九七六年一月～二月

檀原市営住宅への進入路新設に伴う事前調査。調査地は本薬師寺の西南隅部にあたり、発掘面積は四五〇㎡。検出した主な遺構は、藤原京の八条大路と西三坊大路である(図7)。

八条大路SF一〇一は、北側溝SD一〇四と南側溝SD一〇三に挟まれた道路で、溝心々間距離一五・九m、路面幅一四・〇mである。西三坊大路SF一〇二は、東側溝SD一〇五と西側溝SD一〇六に挟まれた道路で、溝心々間距離一五・二m、路面幅一四・一mである。両大路の交差点では、SD一〇五上に二時期にわたって橋(SX一〇七A、SX一〇七B)がかかけられている。

また、これら条坊関連遺構を検出した面よりも下層において、SD一〇五の東約五mの地点で南北溝SD一一〇を検出した。SD一一〇は七世紀後半の土器を包含する整地土の上面から切り込む溝で、本薬師寺の所用瓦を含んでいた。こうした調査所見から、薬師寺の創建は条坊地割の施行に先立つと判断された。

ところが、その後の本薬師寺の調査では、中門および参道の下から西三坊坊間路が検出され(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報二十四』(一九九四年)など)、条坊地割の施行を行なった後、薬師寺が創建された点が新たに判明した。これは西南隅部の調査所見とは完全に逆転したものである。西南隅部における土層関係の把握に誤りが

ないとすれば、本薬師寺の造営開始後も整地作業が行なわれ、条坊道路側溝が掘り直されたことになる。

木簡は八条大路の北側溝SD一〇四の堆積土下層から三点出土した。SD一〇四は幅二・二m、深さ〇・四五m。共伴遺物に刀形木製品一点がある(図版八)。この刀形木製品は現存長さ約二〇cmで、刀身の大半を欠く。柄の形状は蕨手刀に類似し、刀身は柄より一段狭い。柄の細部は墨線で表現する。

発掘調査の詳細は『飛鳥・藤原宮発掘調査概報六』(一九七六年)を参照されたい。

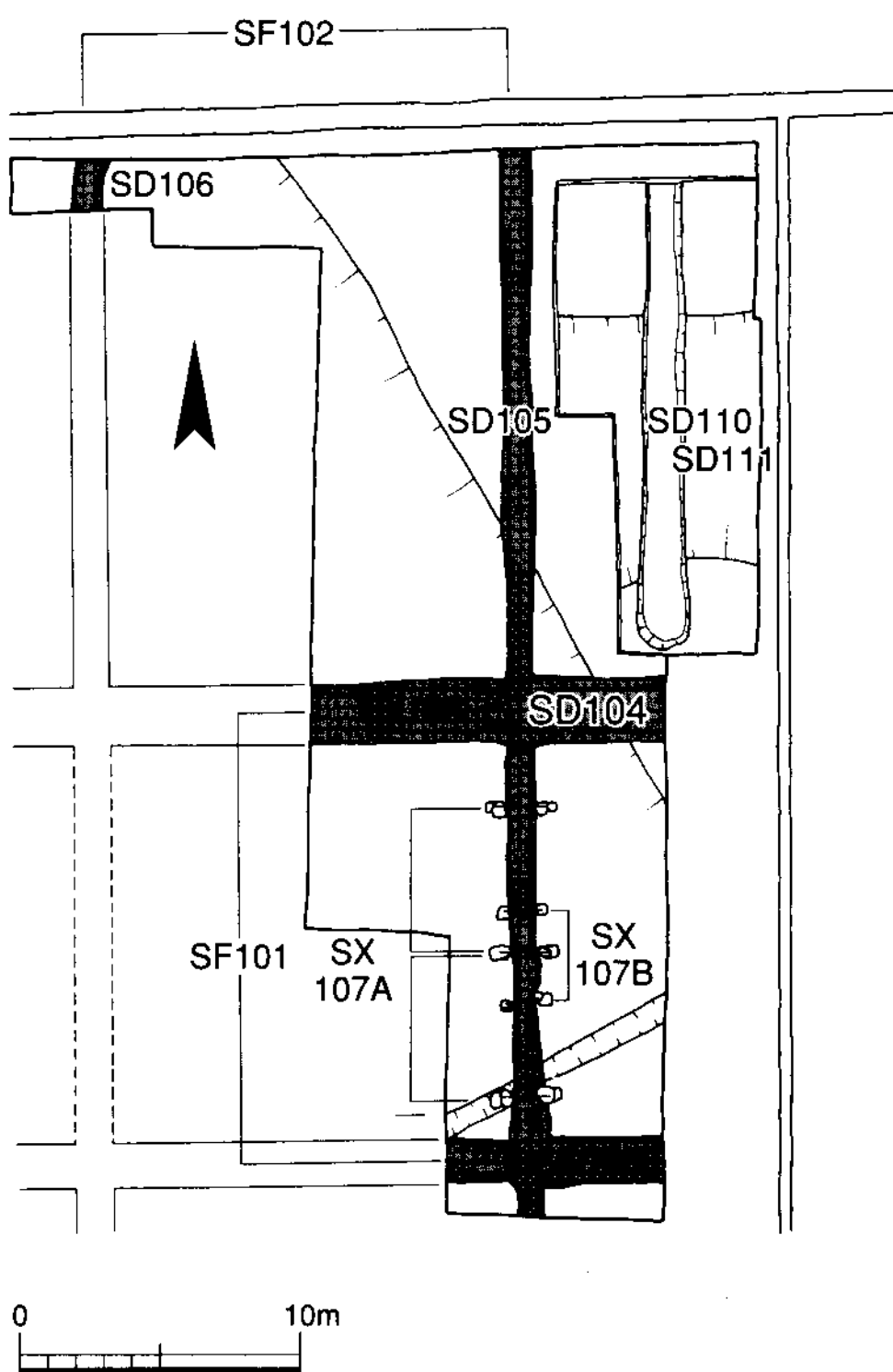


図7 本薬師寺西南隅遺構図 1:500

第六五次調査（右京一条一坊西南坪の調査）

6AJ P 区 一九九一年二月～三月

大型店舗建設に伴う事前調査。調査は藤原京右京一条一坊西南坪を中心とする東西二つの地区で行ない、発掘総面積は一一一〇㎡。

東区は南北に長い調査区を設定し、一条々間路SF六八〇〇を検出した。路面幅は五・六mで、北側溝SD六八〇二と南側溝SD六八〇一の側溝心々距離は六・八mである。

西区では藤原宮期直前の建物二棟（SB七二三三・七二四五）・土坑一基（SK七二四〇）、藤原宮期の建物四棟（SB七二三〇・七二三二・七二三四）・塀一条（SA七二三五）・井戸三基（SE七二三七・七二四三・七二四四）・土坑五基（SK七二三六・七二三八・七二三九・七二四二・七二四七）を検出した（図8）。建物は小規模で数も少ないが、井戸は藤原京跡の他の事例に比べて多い。調査区内からは、輪羽口・銅滓付埴埵・銅製品・銅滓・鑄型などが出土しており、付近に銅工房に関わる施設が存在した可能性がある。木簡は、西区の井戸SE七二三七から一点出土した。井戸は掘形径約三・二mのほぼ円形で、深さは一・七m。本来は木枠組と考えられるが、抜き取られており、一部に裏込の礫が残っていた。埋土は上から順に、暗灰茶色粘質土、暗灰褐色粘質土、暗灰色粘土となり、木簡は最下層の暗灰色粘土から出土した。井戸内からは、飛鳥Vの土器、木簡状木製品二点、「于」の墨書土器（須恵器蓋）、転

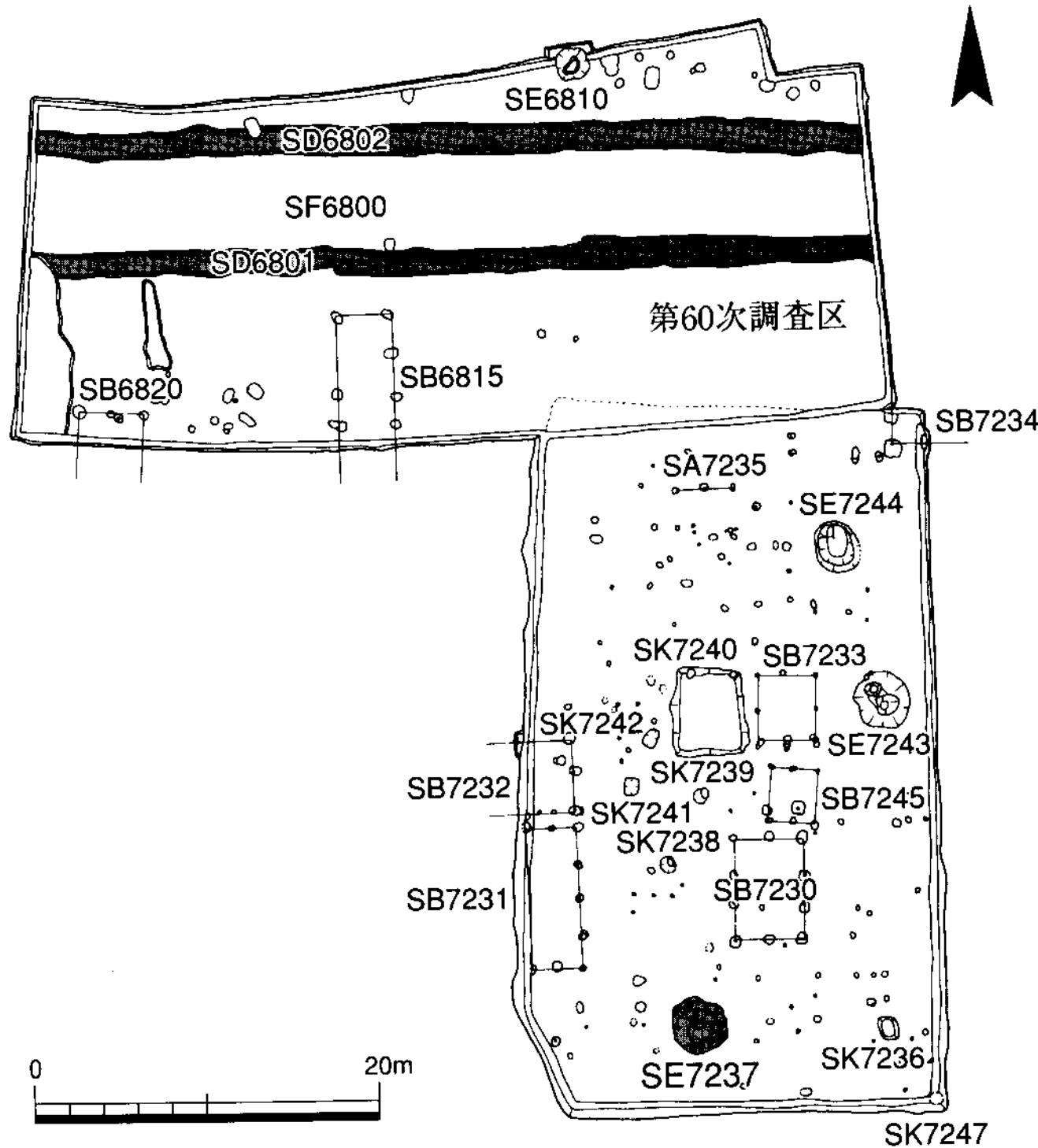


図8 第65次調査西区遺構図 1:700

用硯、漆の付着した杯、輪羽口、砥石、刀子が出土している。また、東区のSD六八〇一から「郡□」の墨書土器（須恵器蓋）、^{〔明カ〕}西区の土坑SK七二三八から「ア」の刻書土器、SE七二四三から「御」などを習書した墨書土器（転用硯）が出土している。以上、発掘調査の詳細は『飛鳥・藤原宮発掘調査概報二十二』（一九九二年）、『藤原京右京一条一坊発掘調査報告』（一九九七年）を参照されたい。

二、凡例

(一) 木簡は内容により、文書、付札、その他の順に排列するのを原則とし、便宜的に通し番号を付した。

(二) 釈文の漢字は概ね現行常用漢字に改めたが、一部本字や異体字を用いた。

(三) 釈文に加えた符号は次のとおりである。

・ 木簡の表裏に文字がある場合、その区別を示す。

○ 木簡の上端もしくは下端に孔が穿たれていることを示す。

∴ 同一木簡と推定されるが直接接続せず、中間の一字以上が不明なことを示す。

□□□ 欠損文字のうち字数の確認できるもの。

□□□ 欠損文字のうち字数が数えられないもの。

□□□ 記載内容から、上または下に一字以上の文字を推定したものの。

「」 異筆、追筆。

■ ■ ■ 抹消により判読が困難なもの。

々々々 抹消部分の字画が明らかでない場合に限り、原字の左傍に付した。

〔×〕 文字の上に重書して原字を訂正している場合、訂正箇所
の左傍に・を付し、原字を上のを領で右傍に示した。

「」 合点。

「」 校訂註のうち本文に置き換わるべき文字を含むもの。

() 右以外の校訂註、および説明註。

カ 編者が加えた註で、疑問が残るもの。

マ、 文字に疑問はないが、意味が通じ難いもの。

(四) 釈文下の右行上段のアラビア数字は、木簡の長さ・幅・厚さを示す(単位はmm)。欠損・二次的整形の場合、現存部分の法量を括弧つきで示した。長さ・幅は木簡の文字の方向による。

(五) 釈文下の右行中段に現在の遺存の形態を示す型式番号を記した。なお端とは、木簡を木目方向においた時の上下両端をいう。

011型式 長方形の材(方頭・圭頭などもこれに含める)のもの。

015型式 長方形の材の側面に孔を穿ったもの。

019型式 一端が方頭で、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は011・015・032・041・051型式のいずれかと推定される。

021型式 小型矩形のもの。

022型式 小型矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みを入れたもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある。

032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みを入れたもの。

033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みを入れ、他端を尖ら

せたもの。

039型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は031・032・033・043型式のいずれかと推定される。

041型式 長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状に作ったもの。

043型式 長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状にし、左右に切り込みをもつもの。

049型式 長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状にするが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。

051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

059型式 長方形の材の一端を尖らせているが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は033・051型式のいずれかと推定される。

061型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。()内に製品名を註記した。

065型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

081型式 折損・割截・腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

091型式 削屑。

()内の番号は二次的整形の場合に推定できる原型の型式。

(六) 積文下の右行下段に出土地点を示す小地区名(アルファベット・数字)を記した。Zは地区不明を示す。複数の地区から出土した破片が接続したものは地区名を併記した。

(七) 積文の出土地点下に付した「*」印は、口絵図版に写真を掲げた木簡を示す。例えば「*」は「図版二」に対応する。

(八) 積文下の左行に、木簡の原形を保持しない部分の形状に関する注記などを施した。その際、木簡の「上端」「下端」「左辺」「右辺」を「上」「下」「左」「右」と略記した。

(九) 地名表記を持つ木簡の一部について、『和名類聚抄』にもとづいて地名を推定した。推定地名は説明註として積文右行に記し、『和名類聚抄』本文に記載のない地名については「」で表現した。なお、地名推定に際しては、池邊彌『和名類聚抄郡郷里驛名考證』(吉川弘文館、一九八一年)などを参照した。

木簡の釈読は、都城発掘調査部の市大樹・竹本晃が行なった。編集に際しては、池尾直洋・酒井健治・吉水葉子の各氏の協力を得た。写真撮影には井上直夫があたり、現像・焼付には岡田愛が補佐した。図版作成には稲田登志子・玉木学恵・増田朋子氏の助力を得た。本書の編集は市大樹・竹本晃が担当した。

11 □□

□人 □□ □

(54)・(27)・2 081 Q075
四周欠損。

17 大伴ア□□

88・29・4 051 Q075 *4
右下欠。

12 □□事□□□
〔土師カ〕〔皮カ〕

(108)・(17)・4 081 QP76
上下折レ、右割レ。

18 物ア君

(72)・21・2 039 PA76 *4
下折レ、左上欠。

13 (美濃国不破郡三桑郷・同大野郡三桑郷)
以三月十三日三桑五十戸
御垣守瀆尻中ツ刀自

123・17・3 032 QR75 *4
左上・右上・右下欠。

20 主寸(刻書)

52・44・6 032 Q078 *5
右上欠。

14 (讃岐国三野郡)
三野評凡人 日下ア加利
同ア衆他

□□□□
〔出葉カ〕

134・18・5 031 Q075 *4
左下・右下欠。

21 □□□□□
〔罪与カ〕

(321)・27・3 019 PA76
下折レ。

15 □月春日ア□

六斗

(68)・(21)・6 081 Q075
上下折レ、右割レ。

22 □□□□□
〔井カ〕〔上カ〕

(69)・12・2 019 QP75
下折レ。

南北溝SD四一一一

16 □月廿日 □
〔贄カ〕

(61)・(44)・2 081 Q075 *5
四周欠損。

23 □□
〔物カ〕〔齋〕

(66)・(22)・5 081 QP81
上下折レ、左割レ。

24 母知二斗 (83)・30・5 039 QR81
上折レ、左下・右下欠。

25 仏仏□ (92)・(23)・1 081 QR81 *5
下折レ、右割レ。

南北溝SD一三四七A

26 病弥以□□ (119)・(18)・4 019 PB74 *3
□□□□□□□□
左二次的整形、下折レ。

27 〔佰カ〕 □直□申□…□□
〔玉造カ〕 □□□□ア…□□
(105+66)・22・3 051 QR74
上折レ、左下欠。

28 □評□□五十□□□□□□
〔戸人カ〕 □□□□
□□斜旦
(277)・30・1 019 PB74 *2
上折レ、左下・右下欠。

29 尾治ア 90・(38)・7 081 PA74 *3
若麻続ア 左下以外欠。

30 〔丙戌カ〕 □□年二月四
〔敬カ〕 □□□陳
(98)・25・3 011 PA74 *3
下二次的整形。

31 奈貴下黄□五連〔布カ〕
220・24・3 032 PA74 *4
左上・右下欠。

32 原五十〔戸カ〕 54・25・5 051 QR74 *4

33 〔贊カ〕 □□五戸小長□浴カア
(157)・(23)・5 081 QP73 *5
上折レ、左右割レ。

34 己卯年 (55)・25・3 039 PA74
下折レ、左上・右上欠。

35 〔各田カ〕 □□□□
(41)・(18)・2 039 PB74
下折レ、左割レ。

36 和軍布十五斤 133・27・4 011 PA74 *4

37 六月

199・(23)・8 081 QR74
左二次的割截カ。右下欠。

遺物包含層

43
〔丁五人カ〕

(57)・(13)・4 081 QR79
上下折レ、左割レ。

38
〔康カ〕
嫡嫡

(87)・(42)・4 081 QR75
上折レ、左上・右上焼損、
左下・右下欠。

44
結足矩
〔真カ〕 丕 (刻書)

(133)・38・12 019 Q080 *5
下折レ。

39 識識識

〔方カ〕
東

(92)・(24)・3 081 QR74 *5
上二次的整形、左二次的割截。

第一四二・一四四次調査 (5AJG区)

南北溝SD九八一五

45

091 DA68

40
〔五十戸カ〕
ア

41
〔日カ〕
月

091 Q074

第一二八次調査 (5AJG区)

南北溝SD九八一五

南北溝SD一三四七B

42 海ア奈々古

130・22・4 032 QR74
左上・右下欠。

46
十
〔一カ〕
〔二カ〕

(72)・(14)・1 081 EF70
四周欠損。

47 □三
(27)・(6)・2 081 EF70
四周欠損。

48 □此者力
091 EF70

49 太寶□
091 EF70

50 太寶
091 EF70

51 太寶
091 EF70

52 □六月力
091 EF70

53 □十月力
091 EF70

54 □二日
091 EF70

55 □二日力
091 EF70

56 □二力
091 EF70

57 □十日
091 EF70

58 冠六
091 EF70

59 □七位力
091 EF70

60 □年卅四
091 EF70 *6

61 □車力
091 EF70

62 □五力
091 EF70

63 □列力
091 EF70

64 □通
091 EF70

65 □通二力
091 EF70

66 □通力
091 EF70

67 □逃三力
091 EF70

68 病
091 EF70

69 □二力
091 EF70

70 □六人
091 EF70

71 □口
091 EF70

72 飯五
091 EF70 *6

73 米□
091 EF70

74 □老力
091 EF70

83	□ 二	091 EG69	93	□ □ □ ^[五カ]	091 EF70	103	八	091 EF70
82	二□	091 EF70	92	四	091 EF70	102	□ 八	091 EF70
81	□ ^[十カ] 古□	091 EF70	91	□ 四	091 EF70	101	□ ^[六カ]	091 EF70
80	□ ^[匹カ]	091 EF70	90	三	091 EF70	100	六	091 EF70
79	□ ^{六匹} □□	091 EF70	89	三	091 EF70	99	六	091 EF70
78	□ ^[布カ]	091 EF70	88	三□	091 EF70	98	六	091 EF70
77	□ ^[醬カ]	091 EF70	87	三□	091 EF70	97	六	091 EF70
76	竺皮□	091 EF70	86	□ ^[二カ]	091 EF70	96	六□	091 EF70
75	□ ^[十石カ] □	091 EF70	85	二	091 EF70	95	□ ^六 □	091 EF70
			84	二	091 EF70	94	□ ^五	091 EF70

113	112	111	110	109	108	107	106	105	104
九十	□ _八 □ _九 〔カ〕	冊七	□十四	□ _十 □ _三 □ _四 〔カ〕	□ _十 □ _二 〔カ〕	□ _十 〔カ〕	□ _十 〔カ〕	十	十□
091 EF70	091 EF70	091 EF70 *6	091 EE70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EE70	091 EF70	091 EF70
	121	120	119	118	117	116	115	114	
	□ _参 □ _河 □ _国 □ _宝 □ _钵 □ _郡 〔カ〕 赤日子里	□〔郡カ〕	□〔郡カ〕	□〔郡カ〕 □〔カ〕	□郡□	□〔郡建カ〕 □〔カ〕	□〔无耶カ〕 □〔国カ〕	百	
	091 EF70 *6	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EE70	091 EF70	
131	130	129	128	127	126	125	124	123	122
□□里	□□里□	□里□□	□□里□	里岡□〔田カ〕	里君子ア□	ア□〔里カ〕	□□〔毛里カ〕	□□〔六里カ〕	穴里
091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EE70	091 EF70	091 EF70	091 EF70

141	140	139	138	137	136	135	134	133	132
□ □〔里力〕	□ □〔里力〕	□里	□里	□里 □	□里 □	□里 □	□里 □	□ □里	□ □ □〔里力〕
091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70

150	149	148	147	146	145	144	143	142
□尾治連訓子	□〔里力〕	□〔里力〕	□〔里力〕	□〔里力〕	里	□〔里力〕 □	里 □	里 □
091 EF70 *6	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70

158	157	156	155	154	153	152	151
五百□〔木力〕	□〔大伴力〕 □	大□〔伴ア力〕 □ □	□〔池辺力〕 □ □	小長□〔谷力〕	□〔刑ア力〕 □ □	他田大□〔臣力〕	□〔依力〕 山下首
091 EF70	091 EF70	091 EF70 *6	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70 *6	091 EF70

159
〔五百木アカ〕
□□□□

091 EF70

160
土ア忍□

091 EF70 *6

161
□日下ア

091 EF70

162
日下ア

091 EF70 *6

163
□□□□〔日下カ〕

091 EF70

164
□□〔日下カ〕

091 EF70

165
□□〔日下カ〕

091 EF70

166
日置

091 EF70

167
□□〔日置カ〕

091 EF70

168
〔丈アカ〕
□□□□

091 EF70

169
丈ア□

091 EF70

170
□丈ア

091 EF70

171
□□〔丈アカ〕

091 EF70

172
□□〔丈アカ〕

091 EF70

173
□□〔丈アカ〕

091 EF70

174
□□〔丈アカ〕

091 EF70

175
上丈

091 EF70

176
□□〔丈カ〕

091 EF70

177
□□〔丈カ〕

091 EF70

178
□□〔丈カ〕

091 EF70

179
□□〔物アカ〕
ア宇□

091 EF70

180
□
大田ア
□

091 EF70

181
□□〔大アカ〕
ア□

091 EF70

182
□生ア

091 EF70

183
君□〔子カ〕
□

091 EF70

184
□□〔丸子カ〕
□□

091 EF70

185
師連□□

091 EF70

186	□茨□□ _[アカ]	091 EF70
187	木□ア	091 EF70
188	□甘ア	091 EF70
189	取ア	091 EF70
190	□舍人□	091 EF70 *6
191	□□連小□	091 EF70 *6
192	□木連	091 EF70
193	□族□ _[臣カ]	091 EF70 *6
194	造智万	091 EF70
195	造	091 EF70
196	□造 _[カ]	091 EF70
197	□□ □日佐	091 EF70
198	□直 _[カ] □細目	091 EF70
199	□直 _[カ]	091 EF70
200	□首久皮太	091 EF70 *6
201	□□□ □首 _[カ]	091 EF70
202	□首 _[カ]	091 EF70
203	□□□得万□ _{[アカ][呂カ]}	091 EF70
204	□古万呂 _[アカ]	091 EF70
205	□ア長田	091 EF70
206	□ア尼	091 EF70
207	□ア□ _[甘カ]	091 EF70
208	ア己□	091 EF70
209	ア□ _[君カ]	091 EF70
210	ア□ _[嶋カ]	091 EF70
211	□ア	091 EF70
212	□ア□	091 EF70

223	222	221	220	219	218	217	216	215	214	213
□ ア	□ ア	□ ア	□ ア	□ ア □	□ ア □	□ ア □	□ ア □	□ ア □	□ ア □	□ □ ア
091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70
234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224
ア □	ア □	ア □	ア □ □	□ ア	□ ア	□ ア	□ ア	□ ア	□ ア	□ ア
091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70
244	243	242	241	240	239	238	237	236	235	
官麻□	古万□ _[呂カ]	□古麻呂	□万呂	□祖 □□	□人□□君末呂□	ア	ア	ア □	ア □	
091 EF70 *6	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EG70	091 EF70	091 EF70	
			240号と同一簡カ。	241号と同一簡カ。						

254	253	252	251	250	249	248	247	246	245
呂	呂	呂	呂	□ _呂 □ _力	□ _呂 □ _力	□ 呂	□ _万 呂	□ _万 呂	□ _万 呂
091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70

264	263	262	261	260	259	258	257	256	255
□ _人 □ _力	人 □ □	□ _人 □	□ _人 □	□ _人 □ _力 □	□ _人 □ _足 □ _力	□ _人 □ _末 □ _力	□ _大 人	呂	呂
091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70

274	273	272	271	270	269	268	267	266	265
□ _麻	黑 □	若 □	□ _君 □ _力	□ _君	□ _弟 □ _力	□ _千 嶋	道 国	刀 良	人
091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70

283	282	281	280	279	278	277	276	275		
□正□ □正□ □正□	□於□ □於□ □於□ □孔□	□王□ □王□	□王	□王□ □王□ □十	□天□ □天□ □久□ □久□	□天□ □王□	□足	□嶋		
091 EF70	091 EF70 *6	091 EE70	091 EF70	091 EF70	091 EE70	091 EF70	091 EF70	091 EF70		
293	292	291	290	289	288	287	286	285	284	
□支□	道	□道□ □道□	□道□ □道□	□上□	□在□ □勿□	□木□ □馬□	□賜	□賜□	□賜□ □賜□	
091 EF70	091 EF70	091 EE70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	
304	303	302	301	300	299	298	297	296	295	294
□子□	□行□	内	□内□ □内□	□大□	大	大	大	□大□	□志	□志□
091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EE70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70	091 EF70

314 □古力 □古力 091 EF70

313 □古力 □古力 091 EE70

312 古 □ 091 EF70

311 佐 □ 091 EF70

310 □文 □ 091 EF70

309 皮 □ 091 EF70

308 □建 □ 091 EF70

307 □得 □ 091 EF70

306 □得 □ 091 EF70

305 □子 □ 091 EF70

325 午 □ 091 EE70

324 商 □ 091 EF70

323 依 □ 091 EF70

322 □之 □ 091 EF70

321 □之 □ 091 EF70

320 □家 □ 091 EE70

319 □与 □ 091 EF70

318 □御 □ 091 EF70

317 事 □ 091 EF70

316 唯 □ 091 EE70

315 □古力 □ 091 EE70

326 蘇 □ 091 EF70

327 □紫力 □ 091 EF70

328 □方力 □ 091 EF70

第三一二次調査(6AJH区)

土坑SK7071

329 符雫物 □持力 □ 今卅人 阿布 □ (91)・19・3 019 S134 *7 下折↙。

330 □右京職解力 □ (95)・(7)・4 081 S134 *7 四周欠損。

331 殿 [大蔵カ] 殿 [司カ]
 (159)・(7)・2 081 S134
 下折レ、左右割レ。332号
 ト同一簡カ。

332 奉出
 (64)・(8)・2 081 S134
 上折レ、左右割レ。331号
 ト同一簡カ。

333 「駿度之子」
 (34+139)・40・5 019 S134
 上割レ。他に同一簡アリ。

334 生百
 (73)・10・2 019 S134
 下折レ。

335 [急カ]
 (93)・(19)・2 081 S134
 上折レ、左右割レ。

336 丁无 (46)・(9)・(2) 081 S134
 四周欠損。

337 四坊刀祢 091 S134 *7

338 坊 091 S134

339 [坊カ] 091 S134

340 地損破板屋一間 091 S134 *7

341 家地 [鳥カ] 091 S134

342 牟家 091 S134

343 疾三 091 S134

344 [五人カ] 091 S134

345 [株カ] 091 S134

346 乎四 091 S134

347 乎 091 S134

348 [一カ] 大 091 S134

349 三 091 S134

350 [合七カ] 091 S134

351 和調三 091 S134

352 [丁カ] 荒 091 S134

353 [多カ] 丁 091 S134

354 正八位上羽咋 091 S134

355 進正七 091 S134

364	□ □ □ □ [戦力]	091 S134
363	□ □ 弥 [古力]	091 S134
362	□ 甘人 □	091 S134
361	□ 金万呂	091 S134
360	□ ア	091 S134
359	□ □ 子首 □ □	091 S134
358	□ □ 日 □ [佐力]	091 S134
357	畝火 □	091 S134
356	二田造 □ □ [塩力]	091 S134 *7
374	□ □ □ □ [可力]	091 S134
373	可 □ □ □ □ □ □	091 S134
372	□ □ [南見力]	091 S134
371	□ □ 朋 □ □ [見有力] □ □ 田 □ 取 □ □	091 S134
370	□ 入	091 S134
369	□ 叫	091 S134
368	□ 冊	091 S134
367	□ □ □ 田	091 S134
366	□ □ □	091 S134
365	□ □ 冊	091 S134
385	□ □ 太 □	091 S134
384	□ □ 主 □	091 S134
383	□ □ 石 □	091 S134
382	□ □ 戸 □	091 S134
381	戸 白	091 S134
380	□ □ [連力] □ □	091 S134
379	□ □ [連力] □ □	091 S134
378	□ □ 連 □	091 S134
377	□ □ 年 □	091 S134
376	□ □ 児 □	091 S134
375	道 □ □	091 S134

386 大□ 091 S134

387 □₁賜₂□₃力₄ 091 S134

388 □₁得₂□₃力₄ 091 S134

389 □₁之 091 S134

390 有 091 S134

391 □₁嶋₂力₃ 091 S134

土坑SK70711

392 伴ア 110・14・5 051 S135 *7

393 □₁十 091 S135

394 十 091 S135

395 連族□₁□₂ 091 S135

396 □₁ア₂力₃□₄ 091 S135

397 赤末呂 091 S135

土坑SK70711

398 卅八 (115)・14・4 019 S136
上二次的切断。

399 高向□ (65)・(20)・3 081 S136 *7
下折↙、左右割↘。

400 □₁之₂力₃□₄ (48)・(3)・4 081 S136
上下二次的切断、左右二
次的割截。

401 □₁正₂月₃力₄□₅□₆□₇ 091 S136

402 戸主山□₁□₂□₃□₄□₅□₆□₇ 091 S136 *7

403 戸主□₁□₂□₃□₄力₅ 091 S136 *7

404 □₁戸₂廿₃四 091 S136 *7

405 □₁□₂長₃十五₄丈 091 S136 *7

406 長 091 S136

407 三 □ 091 S136

408 十₁□₂□₃力₄ 091 S136

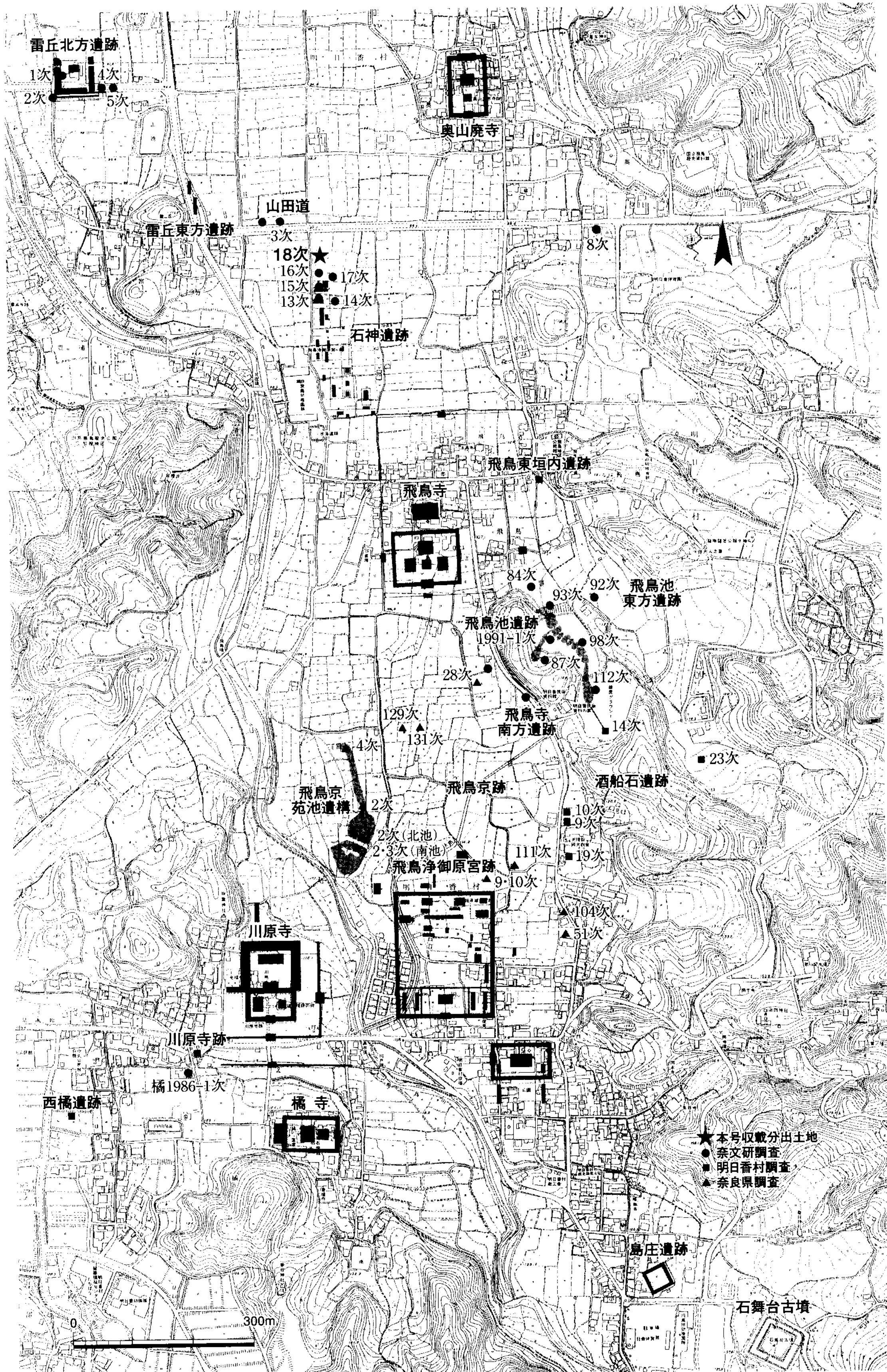
409 □₁五₂十三 091 S136

410 □₁八₂□₃十₄力₅ 091 S136

411 大初位 091 S136

412 末呂□₁力₂米₃力₄ 091 S136

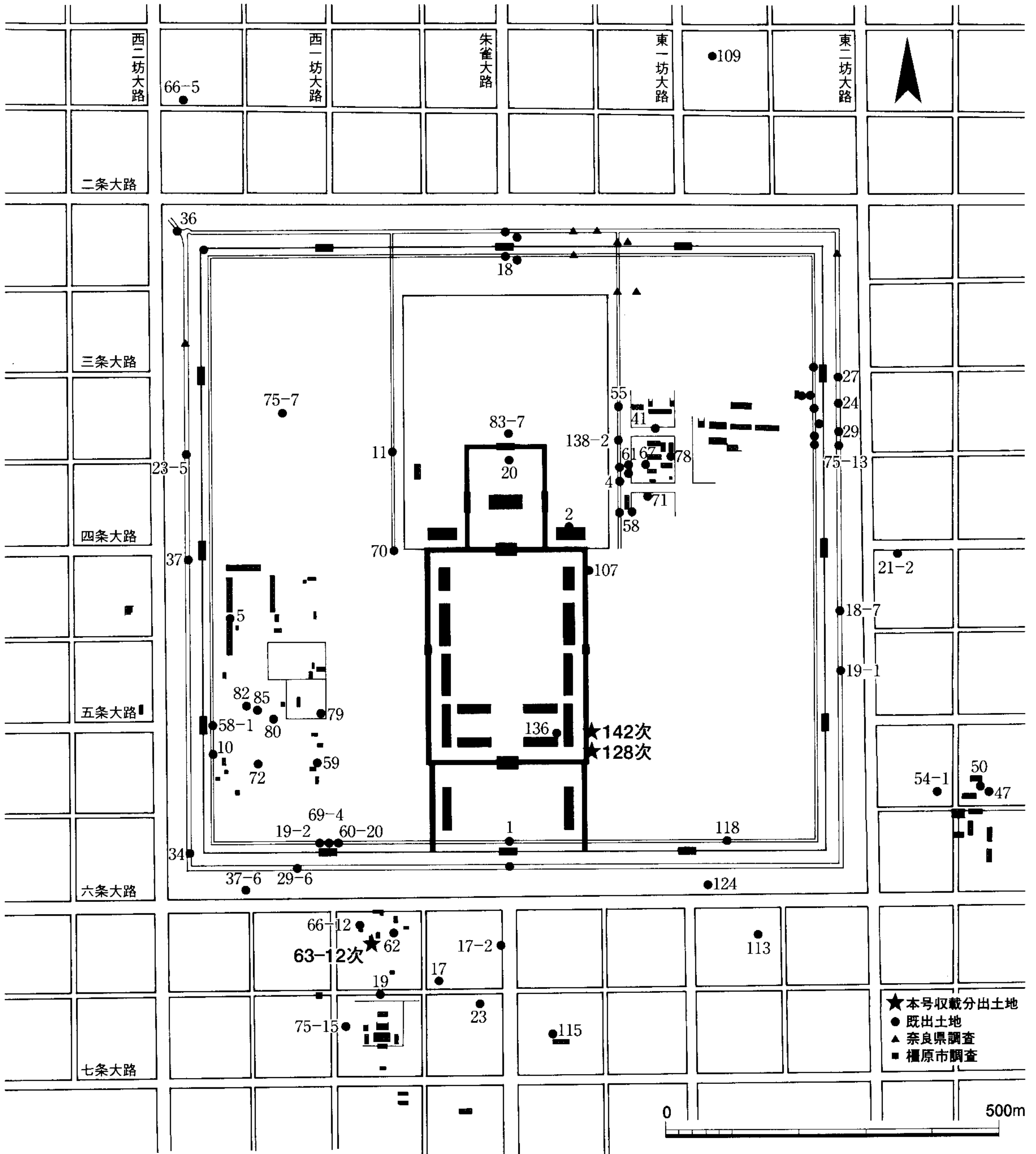
422	421	420	419	418	417	416	415	414	413
□川 坂カ	□廿 廿	中□	□中	人□	四□	三□	一□ 段	□ □ □	少女□
091 S136	091 S136	091 S136	091 S136	091 S136	091 S136	091 S136	091 S136	091 S136 413号同一簡カ。	091 S136 414号同一簡カ。
431	430	429	428	427	426	425	424	423	
主主	□手 佐和	自□ 百力	□正 カ	天	長	□ □ □	□司 □	□ 衛	
091 S136	091 S135又S136	091 S135又S136	091 S136	091 S135	091 S136	091 S136	091 S136	091 S136	
440	439	438	437	436	435	434	433	432	
□人 カ	□首 カ	□之 カ	□之 カ	安□	寿□	□ □ □	□原 □	□宮 □	
091 S136	091 S136	091 S136	091 S136	091 S136	091 S136	091 S136	091 S136	091 S136	



- ★ 本号収載分出土地
- 奈文研調査
- 明日香村調査
- ▲ 奈良県調査



飛鳥地域木簡出土地 1:10000



藤原宮木簡出土地 1:10000

二〇〇七年十一月十五日 印刷
二〇〇七年十一月二十二日 発行

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(三)

編集・発行 独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所

〒六三〇―八五七七
奈良市二条町二丁目九―一
TEL 〇七四二(三四)三九三二
FAX 〇七四二(三〇)六八三〇